

第1回 ポスト牧野博検討委員会 議事概要

日時：令和5年5月10日(水)15:00～17:00

場所：高知共済会館 3F「桜」

〈配付資料〉

【資料1】本県観光を取り巻く現状と課題

【資料2】令和6年度以降の観光戦略の骨格案

【資料3】本委員会で議論頂きたい主な論点

【参考資料①】リョーマの休日キャンペーン推進委員会でのご意見

【参考資料②】令和6年度以降の観光誘客戦略 検討スケジュール

〈その他配布物〉

・委員名簿

・配席図

・委嘱状

・ポスト牧野博検討委員会設置要綱

・「BEAUTIFUL ORDINARY KOCHI 高知県で出会う、美しいふつう」

1 開 会

進行：高知県観光政策課 吉野課長補佐

2 委員紹介

3 観光振興部長挨拶

挨拶：高知県観光振興部 山脇部長

4 委員長、副委員長選出

5 議事

進行：藤本委員長

【参考資料②】令和6年度以降の観光誘客戦略 検討スケジュール

説明：高知県観光政策課 鈴木課長

令和6年度以降の観光誘客戦略について

【資料1】本県観光を取り巻く現状と課題

【資料2】令和6年度以降の観光戦略の骨格案

【資料3】本委員会で議論頂きたい主な論点

【参考資料①】リョーマの休日キャンペーン推進委員会でのご意見

説明：高知県観光政策課 鈴木課長

意見交換

発言：岡林委員

- ・ アドベンチャーツーリズムにおけるインバウンド誘致、富裕層をターゲットとした打ち出し方ができないだろうか。長期滞在にも繋がる。ただし、アドベンチャーツーリズムの成功には時間がかかることが予想される。過去のNHK連続テレビ小説「あまちゃん」の事例を見ると、ドラマ放送がきっかけで話題化し今もなお観光地として栄えている。必ずしも視聴率=人気ではない。SNSでの話題化がマスコミで取り上げられ、全国に広がるパターンも。朝ドラは若い人は見ない。若年層を誘客するのであれば、SNSを活用した発信をアドベンチャーツーリズムの前に行い、後々その発信が効かせられるような取組を行ってみるのはどうだろうか。

発言：小松委員

- ・ これまでの観光博覧会やキャンペーンで作ってきた観光コンテンツを、改めてブラッシュアップし掘り起こせないだろうか。これまでの観光への取組を継続したかたちで、集大成としてまとめるようなCPができないか。2年間～5年間といった長期開催ができないか。
- ・ 沈下橋の風景には多様な意味や物語が内包されている。四万十川流域における歴史的背景・人々の暮らし・環境を伝えるような、これまで打ち出してきたものをさらに深掘りできるような観光を実現したい。もともとある観光地の魅力を掘り起こし、地域の足元にあるものをブラッシュアップ・再構築して打ち出していきたい。

発言：広末委員

- ・ 県外観光客のみならず、高知県民が県内各地へ行き、新しい高知の魅力を知ることが観光客の誘客につながる。朝ドラ放送をきっかけに、身近な植物への意識や関心が高まることからわかるように、わたしたちにとっても新しい発見につながる。地元の人にとっての新しい視点や発見づくりを行うことが、観光客にとっても単なる消費にとどまらず、充実した体験を提供することに繋がるのではないだろうか。
- ・ 商店街の活性化について。現在の商店街は疲弊状態。モノを買うだけでなく、いろいろな人が訪れ楽しめる空間づくり、アーケード内でのよさこい練習などを通じて観光客を呼ぶ施策を講じていきたい。
- ・ 来年は昭和100年。関西万博にあわせて、レトロで昭和の雰囲気のある商店街を通じて、話題化できないかと考えている。

発言：友田委員

- ・ 土佐のおきゃくは、現在高知市内で開催されている。過去にはおきゃくをきっかけに高知市外でも開催という事例も。それぞれの地域のおきゃく文化を、年間を通して発信できないだろうか。県内全域でやる方が盛り上がるし、観光客にとっても体験の機会が増える。
- ・ 高知の昭和をキーワードに、県内各地の施設や建物、地元商店街などの「すでにあるレトロさ」をPRすると面白いのではないだろうか。観光客にとっても、旅先の地元商店街は歩いていて楽しいものになるのでは。

発言：渡部委員

- ・ 歴史・体験・食とそれぞれの博覧会で一通り出尽くしたイメージ。これからは、人間が見えてくる観光やこれまで発信してきた各要素全体としての見せ方が重要になってくるのではないだろうか。それぞれの要素の相関関係をどう整理しまとめるのか、具体的な関係性のあり方が見えるようになるのと良い。ひとつひとつの観光素材を別個に発信するのではなく、土佐料理の「皿鉢」の

ようにセットで提供するような見せ方ができないだろうか。

- ・ 歴史や風景や長い時間をかけてつくられたものを、細切れに見せるのではなくいかにスケールを大きく伝えられるか。観光部署と文化施設間での意見交換・連携が重要。杉田委員の意見第一案にあった、「川」をテーマとした観光。水は産業や人々の生活、環境など、あらゆるものに関係している。四万十川・仁淀川・吉野川、それぞれの個性ある川を中心に、それぞれの水系の人々の暮らしが見えてくる。川を中心とした広域観光団体と関することで、「川」のセットが出来上がるのではないだろうか。川からいろんな面白いものが見えてくる。広域観光と連携することで、点ではなく広域的な、ゆったりとした大きなとらえ方で観光コンテンツを打ち出せたら。

発言：古川委員

- ・ 日本国内の代表的な観光地においてはオーバーツーリズムの問題が課題になっている。関係人口と観光も未だ結び付けられていない。これらの課題とともに、他にない高知県の魅力を結び付ける言葉を作れないだろうか。例えば「高知家」は、高知という土地のイメージを想起させるような端的なワード。言葉が生まれると人が動く。高知の観光を表す言葉やシンプル・キャッチーな名前。場所を探しているけど情報が無い・関係性がいまいちわかりにくいといった課題をクリアし、実際にやって来た観光客に対してのおもてなし精神を発揮することができれば、長期滞在につながるのではないだろうか。

発言：吉富委員

- ・ アイディアを具体的なかたちにしていくためのブラッシュアップと整理が必要。資料3(1)目指すべき方向性において、具体的には「滞在日数の増」「リピート率の向上」「観光消費額の増」どこを伸ばしたいのか？
- ・ サステナブルツーリズムにおいても、目指すべきゴールにあわせた検討が必要。高知県独自のサステナビリティ・サステナブル観光とはなにか。環境への配慮やオーバーツーリズムの抑止は大前提として、いかに「サステナブルな関係性」を作れるかということに着目してみてもどうか。

回答：高知県観光振興部 山脇部長

- ・ 資料3(1)にある「滞在日数の増」「リピート率の向上」「観光消費額の増」は別個の目標では無く、全てを追求していくべきだと考えている。単に観光消費額を増やすのではない。現在主流となっている1泊2日では、高知県の本来の良さを知ってもらうのは難しい。どちらかという観光消費額よりも滞在日数を伸ばし、ゆったりと高知の魅力を知ってもらいたい。経済発展という視点では「観光消費額の増」ではあるが、持続的な発展という視点から見ると「滞在日数の増」であり、「リピート率の向上」であると考えている。

発言：吉富委員

- ・ 観光消費額の増が最終的な目標で、それに繋がる施策が滞在日数の拡大やリピート率の向上という考え方で良いか？

発言：小松委員

- ・ 滞在日数の増に関連する話題として、これまでの事例を紹介する。メガサップは、単なるアクティビティにとどまらず、サップの上でコーヒーを提供し時間そのものを楽しめるような「もう一歩踏み入れた時間」を作っている。柏島では貝の採集とともに一緒に採れるマイクロプラスチックについても触れている。これまで作り上げてきた素材やコンテンツの中にもまだまだ隠れた可能性がある。

発言：籠尾委員

- ・ 杉田委員が提示した1~3の案には賛成。海・山・川の三部作にして欲しい。大阪万博に向けて取組を進められたらと思う。奈半利のこいのぼりイベントの際には、ALTの教員が海外から友人を連れてきてくれた。こいのぼりの起源や背景などを説明したところ、海外の人々にとって学びがあったようだった。日本人にとってのあたりまえのことが、海外の人にとっては「なるほど」に繋がる。また、前回も意見として挙げた「神祭への参加」に関しては、室戸ではインドネシア人が参加している。祭りは歴史や文化を通じた海外交流はもちろん、食も酒も総合的に堪能していただけるのではないだろうか。

発言：高知県観光振興部 山脇部長

- ・ 会議の途中ではあるが、頂いたご意見から主軸ともいえる部分が見えてきた。旅行者の興味が単なる食や景色ではなく、探求心を伴うものであることがわかっている。観光資源や文化の背景やストーリー、「なるほど」と知ろうとする気持ちが旅行者に増えてきている印象。SNSの発展に伴い、写真に添えるキャプションが重要。ブラタモリ的な旅行の仕方をする人が増えている。資料3でも提示したように「知ることで高まる」という方向性が考えられるのかなと思う。

発言：古谷委員

- ・ お客様は目的をもって「わざわざ」高知に訪れている。一度は行ってみたいが高知は遠いとよく言われることから、ぜひ長期滞在して高知の良さを知ってもらいたい。高知へ来たらなにかがあるというのは大前提。よさこい・ひろめ市場・各地で開催されているイベント等、コンテンツはあるが、県内の各スポットの距離感を知らない人が多い。距離感やスケジュールリングが組みやすくなるような情報提示、そこに1年間の行事が繋がった形で発信することで、高知に訪れやすくなるのではないだろうか。滞在型観光を推奨するには、タイムリーな情報を提供する発信力を強めていく必要がある。

発言：藤本委員長

- ・ リョーマの休日CPが構成する要素のなかで観光コンテンツとして一番難しかったのは「学び」ではなかっただろうか。NHK連続テレビ小説放送スタートは学びの入り口として非常に入りやすい。知りたい・学びたい気持ちを育てる、学びの観光を提供できる人材育成が必要。観光はコミュニケーション産業でもある。いかにものづくり・ひとづくりができるか。体験型観光には城西館でも取り組んだが、地域の担い手が継続してやってくれるかどうか難しい。経済的な面においても、事業者が観光産業と携わる喜びを得られるような仕組みを作ることで、継続性を作り出すことができるのではないだろうか。高知県観光においてこれまで欠けていた「学び」を補完する良い機会。学びを主軸・テーマとして展開できないだろうか。

発言：小松委員

- ・ 二次交通について。路線バスのグーグル検索が高知県内全域でできるようになった。移動時間をどう楽しく過ごすか。交通弱者にも優しい観光を提供できるような取組が必要。
- ・ 観光客の目標値にはインバウンドも含まれるのか？内訳等も知りたい。

回答：高知県観光振興部 山脇部長

- ・ 今後順次具体的な数値を公開予定。

発言：吉富委員

- ・ 高知の中山間地域においてよりディープなエリアに入りこんで、一つの体験に深く関わるときに、具体的な場所を案内する車に乗せて案内することで発生するであろう規制やグレーゾーンについて

て、どのように対策を講じていくかが課題。

発言：広末委員

- ・ NHK 連続テレビ小説を見ていると、子役の土佐弁がとても上手で、ネイティブに近い。土佐弁も観光における一ワードとなり得るのではないかと。おきやく・街路市・ひろめ市場・路面電車など、土佐弁を聴ける場所で、観光気分を味わうことができる。高知の雰囲気伝えるコンテンツ作りができないだろうか。

発言：岡林委員

- ・ (吉富委員の発言に対して) 現地ガイド料金のなかに、送迎代金を含まないのであれば、法律上は問題ない。

発言：渡部委員

- ・ 地理・歴史・文化・言葉などの土佐文化ミニ講座を高知城歴史博物館で今後取り組む予定。15分～1時間程度の講座をきっかけに観光が充実する。土佐弁は共通語化されない方言で、とても目立つ。高知城歴史博物館だけでなく、各地でそのような仕組みが展開できれば、地元の方との交流も生まれるのではないだろうか。

発言：高知県国際観光課 山本課長

- ・ インバウンドにおいては、来訪者の出身国によって刺さるものが違う一方で、共通する部分もある。今後ご意見を参考にインバウンドの受け入れ体制を改善していきたい。

発言：高知県地域観光課 中村課長

- ・ 長期滞在観光がどのように実現できるか、これまで行ってきた施策の深堀が重要。

発言：高知県観光政策課 鈴木課長

- ・ 観光客にとっての学びはもちろん、地元目線でいえば教えることで高知県民が元気になる。より多くの人を巻き込めるような、良いヒントを頂いた。

発言：高知県観光振興部 依光副部長

- ・ 文化施設との連携の重要性、観光部署外でもやるべきことがあることを感じた。高知県で暮らすことについて、地域ガイドを通じて共感してもらいたいという声をガイドさんから聞いている。様々な側面から高知の魅力を発信できたらと考えている。

発言：高知県観光政策課 小澤企画監

- ・ 大型連休中、渋滞対策・高知新港-牧野植物園シャトルバス内での無料ガイド・ポストカードのプレゼントなどを行ったところ、満足度の高いアンケート結果となった。高知らしい温かいおもてなしを心掛けたい。

発言：古川委員

- ・ 市町村において、「暮らし観光」というキーワードのもとに町おこしが成功した事例(佐賀県嬉野市・神奈川県三崎・愛知県岡崎市など)がある。地元事業者のモチベーション向上にも繋がり、方言や商店街など、高知県民にとって日常的なものや人そのものが観光資源になり得る。おもてなし精神が高い高知県ならではの長所を活かし、しっかりと打ち出していける施策を展開して欲しい。

発言：岡林委員

- ・ 関西万博に合わせたアドベンチャーツーリズムや、知的好奇心を満たすコンテンツ作りにおいて、外国人の受入にあたってヴィーガン対応を強化して欲しい。高知の食材に美味しい物があっても、食べられないのであれば長期滞在は難しい。食の多様性への視点を持つべき。

回答：高知県観光振興部 山脇部長

- ・ 県全体で本格的に推進するとなると、相当予算がかかる。事業者からもそのような声がかかっている。県全体として実現できるかどうか、事業者様のご意見を聞きながら進めていきたい。
- ・ ポスト牧野博の方向性について特にこれというものを持ち合わせていなかったが、本会議のおかげで、高知県の強みを生かした観光施策の方向性が見えてきたように思う。関西戦略については、グリーンツーリズムや自然を生かした施策をとの声があるので、それらも含めてどのように打ち出していくか、今後も検討を重ねていきたい

6 閉 会

進行：高知県観光政策課 吉野課長補佐